子どもの豊かな感性・協調性を育む
自然とのふれあいを大切にする園づくりツアー2015
実施レポート

日　程　　2015年8月17日（月）～23日（日）
視察地　　ドイツ　ノルトライン・ヴェストファーレン州
参加者　　23名

心と体が急速に成長する乳幼児期は、豊かな感性や協調性、創造力などを育む大切な時期です。そうした才能や素質は、日常的に五感を通じて自然とふれあい、保育者やお友達と自然の美しさや不思議さを共有することによって発達していきます。ノルトライン・ヴェストファーレン（NRW）州は、環境先進国ドイツのなかでも最も早くこうしたことに気づき、1990年代はじめより、自然豊かな園庭づくりを奨励してきました。

本ツアーでは、全国から集まった23名の参加者の皆様とドイツ西部に位置する同州を訪れ、NRW州政府が運営する自然環境保護アカデミーや、州が開催した「自然保育所・幼稚園コンクール」で最優秀賞を受賞した園をはじめ、自然豊かな園づくりや園庭ビオトープづくりに取り組む保育所・幼稚園など８か所を視察しました。これはその実施レポートです。

視察企画：（公財）日本生態系協会
後　　援：（社福）日本保育協会、（公社）全国私立保育園連盟、
　　（ＮＰＯ法人）全国認定こども園協会、日本ビオトープ管理士会
協　　力：（株）チャイルド本社、ひかりのくに（株）、（株）メイト

自然とのふれあいを大切にする園づくりツアー2015 訪問先

1．ケーニヒスベルガー通り保育所・幼稚園ファミリーセンター　P３
（８月 18 日午前）

2．ヘルマン・ルーンス通り保育所・幼稚園　P５
（８月 18 日午前）

3．NRW 州自然環境保護アカデミー　P７
（８月 18 日午後）

4．オーバーハウゼン・シュバルツバルド通り保育所・幼稚園と世代を超えた庭　P９
（８月 19 日午前）

5．ドルトムント市営オスルフ通り保育所・幼稚園　P11
（８月 19 日午前）

6．ハム市営シルバーベルク保育所・幼稚園　P13
（８月 20 日午前）

7．ロンカリハウス保育所・幼稚園　P15
（８月 20 日午後）

8．自然幼稚園ヴァーレンドルフ協会森の幼稚園　P17
（８月 21 日午前）

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

自然とのふれあいを大切にする園づくりツアー2015 訪問地の位置

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ケーニヒスベルガー通り保育所・幼稚園ファミリーセンター

「子どもは、五感を使った遊びや体験を通して学ぶ」

この園は、ドイツ労働福祉団体（AWO）ミュンスターラント・レックリングハウゼン支部によって運営されています。NRW州を含むルール地方は、かつては大炭鉱地帯としてドイツにおける産業の牽引役でした。しかし、その後の産業構造の転換により、地域の経済にも変化が起きました。この地域は現在も労働者階級の人々が多く暮らし、近年は外国からの移民の数が増えています。AWO では、経済的な問題を抱える家族や、言葉や習慣の違いなど社会的に困難な状況にある家族の子どもたちにも門戸を広げています。

AWO が運営する園では、AWOの基本方針に基づいて、保育コンセプトが作成されます。AWOの基本方針に、「子どもは五感を使って遊び、体験することで色々なことを学ぶ」と書かれていることから、この園では、子どもたちの五感を刺激する体験を大切にしています。例えば、子どもたちは「この木にはどんな花が咲き、実がなるのだろう」という疑問を持って、園庭に植えられたスグリの木を観察します。そして、咲いた花の香りを嗅ぎ、なった実を食べるという体験を通じて、お店で買って食べることでは分らない自然の営みの不思議さなどを感じてもらうよう促しています。

また、子どもたちだけでなく、保護者の環境意識を高める努力もしています。例えば、迎えに来た保護者が、泥で汚れた服を見て子どもをとがめたときには、その日の遊びを紹介しながら、子どもがどれだけ楽しく飛び回って遊んだかを説明するようにしています。園長のクリック氏は「私たち保育者が若い母親たちの模範になり、子どもと自然との関わりを伝えなければいけない」と使命感に燃えた様子で語りました。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ノルトライン・ヴェストファーレン（NRW）州はそのモットーとして、ドイツ国内で「家族に最も好意的で、子どもに最も優しい州になる」ということを掲げています。その一環で、保育の方法や保育環境の質という点で、一定の条件をクリアした保育施設を「ファミリーセンター」に認定するという制度があります。認定にあたっては、施設の建物やスペースなどに関する条件の他に、子どもや保護者とのコミュニケーションが図られているか、支援や情報提供などが十分に行われているかなどが審査されます。この園も、審査の結果、2009 年にファミリーセンターの認定を受けました。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ヘルマン・ルーンス通り保育所・幼稚園

「自然がなくなると、自分たちの生活もなくなってしまう」

約 40 年前に市営公園の中に建てられたこの園は、約 2,000 ㎡の敷地をもっています。広い園庭には、多くの在来種の草木が生えています。園長のシーヴェ氏は「在来種の木を植えると、たくさんの野鳥がやってくるので、在来種のみを植えることにしている」と言っていました。また、こうした木々は、小鳥だけでなく、木登りをしたり、実をとって食べたりと、子どもたちにとって恰好の遊びの材料になっています。

園庭には、大きな木々のほかに生きものを呼び寄せるための石積みや虫のホテル、植物に囲まれた東屋などがあります。子どもたちはこの東屋でかくれんぼやままごと、おしゃべりなどを楽しみます。

この園では、子どもたちを 2 歳から 6 歳までの様々な年齢の混合グループにしてクラス分けをしています。これにより、年上の子が年下を思いやり、年下の子が年上をお手本にするなど、遊びの中での自発的な助け合いが促されます。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

また、卒園間近の年長の子どもたちは、一声かければ保育者を伴うことなく自然豊かな園庭で自由に遊んでよいことになっています。これは、園庭での遊びのルールや危ないことを子どもたち自身が認識しているからです。大人の監視なしに危険を避けて遊び、無事に戻ることには、子どもたちの自信や達成感にも繋がるという別の良い側面もあります。

シーヴェ氏は、「自然豊かな園で育った子どもは、自然に対する思いやりを持っています。自分が自然の一部だと分かっているため、小さな虫が出てきても、むやみに殺してしまうことはありません。子どもたちは、遊びの中での経験から、自然がなくなると、自分たちの生活もなくなってしまうと、知っているのです。」と言っていました。

園に到着した私たちツアーグループを、子どもたちは自作の日本の国旗を手に、チューリップの歌を日本語で歌って歓迎してくれました。ふるまっていただいたカップケーキは、ものの循環を学ぶために、小麦の粉をひくところから始め、子どもたちも手伝って作ったものだそうです。子どもたちが心を込めて作ったケーキの味は格別でした。

自然が豊かで広い園庭があり、子どもの思いやりを育てる保育に力を入れるこの園の人気が高い理由がよく分りました。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ノルトライン・ヴェストファーレン州自然環境保護アカデミー

「自然の知識を覚えるのではなく、体全体で体験することが大切」

NRW 州自然環境保護アカデミー（NATUR-und Umweltschutz Akademie, Nordhein-Westfalen：以下 NUA）は、NRW 州政府自然・環境・消費者保護省に属する組織で、持続可能な開発のための教育（ESD)、自然環境教育などの研究とその促進に取り組む機関です。NUA は、市民への情報提供や市民との連携などをはかるために、様々なイベントや研修などを開催しており、2014 年には計約 11,000 人の市民が参加しました。

施設には、屋上緑化や太陽光発電、ドイツのレッドデータリスト掲載種が生息する水辺のビオトープなどがあります。所長のニーマイヤー氏より、それらの説明をしていただくとともに、NUA が行っている環境教育の取り組みや自然豊かな園の大切さについてお話をうかがいました。

NUA では、23 年前からバスを使った移動環境教室を実施しています。これは、近くに施設がない人のために、NUA が出向いて、環境教育を行えるよう考案されました。このバスの良さは、誰もが環境教育を受けられるということに留まりません。教室が地元まで来てくれるので、環境教育の素材として、地域在来の植物や昆虫を使って勉強できるという利点もあります。バスの中には、机やイス、顕微鏡など、様々な道具が備え付けてあります。

実際にバスの中に入り、講義を受けました

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

「今でこそドイツには自然豊かな園がたくさんありますが、1960 年代の保育所や幼稚園の園庭には、自然と言えるものがほとんどありませんでした。コンクリートの地面、砂場、木が数本生えているだけというのが標準的な園庭の姿でした。現在は、自然豊かな園の大切さが認められ、1960 年代に多かったそのような園庭はほとんど見られません。」

「子どもは遊びを通して、土・水・生きものなどを自分たちが生きている世界の一部だと理解します。また、人と人とのコミュニケーションも自然の中で学んでいくのです。自然の中で育った子どもに暴力的な子はいません。大切なのは、自然をただ学ぶ、知識として修得するのではなく、五感を使って、体全体で自然を体験することです。そして、子どもたちが自然の中で泥んこになって思いきり遊ぶためには、まず、保護者、特に母親を教育することがとても大切なのです。」ニーマイヤー氏のレクチャーは、日本における自然豊かな園づくりにも役立つ示唆に富んだ内容でした。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

オーバーハウゼン・シュバルツバルド通り保育所・幼稚園と世代を超えた庭

「自然豊かな場所は、子どもたちが学ぶ場所として理想的な環境」

AWO オーバーハウゼンが運営するこの園も、NRW 州政府のファミリーセンターの認定を受けています。園では、自然豊かな環境が子どもたちの学ぶ場所として、理想的な環境だと考え、自然いっぱいの園づくりに力を入れています。

園庭には、虫のホテルやヤナギでつくったトンネル、小高い丘などが配置されています。子どもたちは、虫のホテルにドロバチの巣をつくり、周りにドロバチが好む花を植えたりして、このハチがやってきてくれるのを心待ちにしています。また、園舎の上には屋上緑化や太陽光発電パネルのほか、屋根に降った雨水をためる装置もあります。ためた雨水は、子どもたちがポンプで流して遊んだり、植物の水やりなどに使うそうです。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

カラフルな窓枠がすてきな園舎内で、この園が取り組むKiWiプログラムなどについてお話をうかがいました。KiWiプログラムの主なコンセプトは、環境・自然保護・ESDで、色々なモデルプロジェクトを行いながら、野生の生きものや植物、それらのつながりについて、また環境や自然を守るために必要なことなどについて学びます。週に1度、園にやってくる生態系や野生の生きものなどの専門家と、楽しいプロジェクトなどを行って、自然とは何か、どうしたら一緒に仲良く暮らせるかなどを学びます。

この園では、市内の別の場所にある「カイザーガーデン」という公園の一角に設けられた「世代を超えた庭」も利用しています。ここは、10年前に市とAWOオーバーハウゼンが一緒につくった場所です。州の法律として、今年から1歳以上の全ての子どもが、保育所・幼稚園に通えるようにしなくてはならないということが定められました。しかし、園舎の広さが足りず、全ての希望者を受け入れることができません。そこで、カイザーガーデンをフィールドとして森の幼稚園を開設することにしました。ルーペやピンセット、図鑑などを用意し、疑問に思ったことを子どもたち自身が調べられるようにしています。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ドルトムント市営オスルフ通り保育所・幼稚園

「子どもたちを信頼して園庭の真ん中に植えた木」

ドルトムント市には FABIDO（Familienergänzende Bildungseinrichtungen für Kinder in Dortmund、直訳すると「ドルトムントの子どもたちのために家族の役割を補う保育機関」の意）という組織があります。FABIDO が運営する 102 の園はとても充実しており、その一つであるこの園も子どものことを考えた仕組みがそこここに見られました。

自然とのふれあいを重視した 8000m^2 の園庭には、大きなカシの木、水遊びの場、隠れ家になる茂みや小屋などがあります。切った木や倒木は一ヵ所にまとめて、虫のすみかや子どもたちのバランス遊びの場として活用しています。そこには遊びの最中に見つけた虫をその場で調べられるよう、昆虫図鑑が置いてあります。保育者は、木のぐらつきなど、危険がないかを毎朝確認しています。

園庭の小高い丘には滑り台が設置されています。野草が茂る丘の上までは、階段と野草をかき分けて進む「けもの道」のどちらを使っても行くことができます。園長のツィンペル氏は、「子どもたちは、階段以外で登るのが大好きです。ただし、踏圧で植物が死んでしまってはいけないので、子どもたちには、野草が死ぬとチョウなどの昆虫やその他の生きものもいなくなってしまうということを説明し、定められた「けもの道」を使ってもらうよう伝えています」と言っていました。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

広い園庭は、中心にある大木をはじめ多くの木々や茂みなどがあるので、一ヵ所から全体を見通すことはできません。しかし、保育者の目の届かないところに行ってはいけないという決まりはありません。事前に保育者に一声かければ、園庭のどこにでも自由に行くことができます。なぜなら、子どもたちは普段の遊びの中で、どこが危ないかを知っているからです。他方、保育者も子どもたちを信頼し、自主的かつ自由な遊びを促すために、あえて園庭の真ん中に木を植えたそうです。ツィンベル氏は、「子どもたちは、自然から多くを学んでいます。危険がある場所ではそれを避け、気をつける術を知っています。私たちが思う以上に注意深く、賢いのです。」と言い、誇らしいといった表情で微笑んだのが印象的でした。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ハム市営シルバーベルク保育所・幼稚園

「毎日自然の中で遊ぶ体験が学びになる」

ハム市が運営するこの園は約 1ha の広大な敷地をもっています。駆け回ることのできる在来の野の草が咲く原っぱや樹林、水辺、起伏に富んだ地形など、園庭内には多様な環境が存在しています。

この園では、「子どもたちにとって学びとは体験することである。毎日、自然の中で遊べる子と、1 週間に 1 回だけ遊べる子では、学び方が全く違う」という考えのもと、入園時に保護者に対して、どんな天候でも外で遊ぶことを伝えています。こうした環境のなか、子どもたちは倒れた木に登ってバランス感覚を鍛えたり、園庭に植えられた木の実や果実を集めたりしています。

また、この園では保育者が遊びの企画を立てて、それを実行するという取り組みを行っています。これは、「プロジェクト」と呼ばれ、5 人程度の関心のある子どもが参加して実行されます。子どもたちの興味や年齢などに合わせてつくられたこうしたプロジェクトは、複数が同時進行で行われることもあります。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

保護者の協力でつくったモグラのお墓

例えば、子どもが園庭で見つけたモグラの死体を埋めてあげたいと言ったことをきっかけにスタートしたプロジェクトでは、子どもたちは、死んでしまったモグラの埋葬場所を話し合って決め、お葬式をしました。園庭の説明を聞く私たち視察グループから離れない子どもたちを見た園長のアッカーマン氏は、「明日からあなたたちについてのプロジェクトが開始されるかもしれない。どこから来たのか、どんな国なのか、どんな文化を持っているのか、何をしに来たのかとかね」と楽しげに話されていました。

この園は、園づくりの計画と取り組みが評価され、NRW 州の「自然保育所・幼稚園コンクール」で、最優秀賞を受賞しています。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

ロンカリハウス保育所・幼稚園

「自然豊かな園で育まれる社会性と協調性」

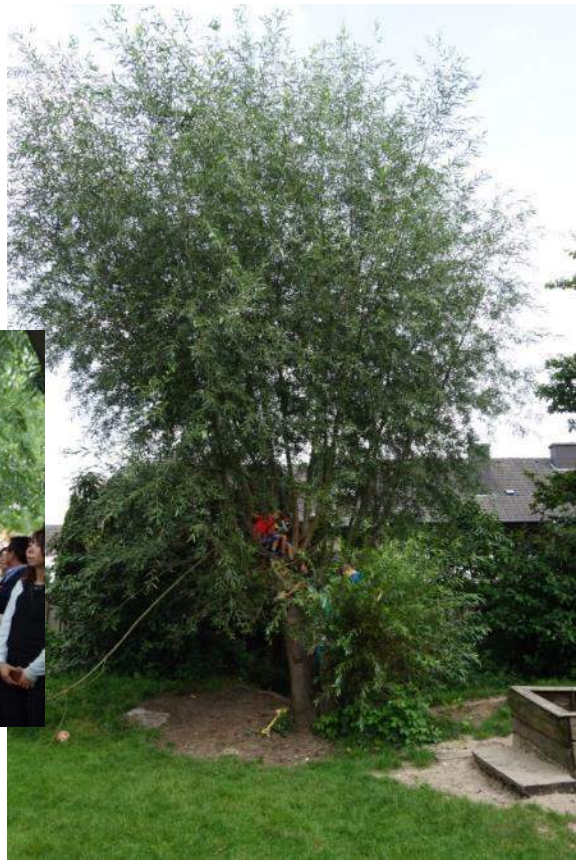
ロンカリハウス保育所・幼稚園では、子どもたちにとって野外での自由な遊びが重要だという考えに基づいて 1993 年に園庭の改造を行いました。園庭づくりの計画は、景観設計士の力をかり、実際の作業は保護者の協力を得て行いました。その後も 10 年に 1 度くらいの割合で、大きな改修を行ったり、新しいものを作ったりしています。現在は、保護者とともにヤナギの木にツリーハウスをつくる計画が進行中とのことでした。

※景観設計士（landscape architect）とは、人間と自然環境の持続可能な関係のための景観づくりや、人と環境が調和した生きものに優しいトータルな景観設計を目指して、土地利用・植栽デザイン、管理等を行う専門家のこと

園庭には、ヤナギの大木が生えている小高い丘があり、この丘の中にはトンネルが掘ってあります。トンネルは中で曲がっているため、入口から出口の様子を見られないような仕掛けが施されています。その他細部にわたり、子どもたちを楽しませる工夫が施されていました。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

「自然に富んだ園庭は、遊びながらみんなで譲り合ったり、話し合ったり、助け合ったりできるので、社会性、協調性を養うのにとても良い効果がある。」と園長のアルトホフ氏は語っていました。



この園では、園庭の改修や園舎の修繕などの作業が必要なとき、約半数の保護者が喜んで手伝いに来てくれるということです。協力してくれる保護者が多く、人手が十分に足りているため、時には作業がないということもあります。しかし、保護者とのコミュニケーションをとても大切していることから、月に１度程度そうした会を召集し、みんなで料理を作って食べるなど、楽しい時間を共有しています。

また、園舎内には、子どもを迎えに来た保護者とのコミュニケーション・エリアが設けてあります。このスペースは、保育者への相談事や保護者同士の情報交換などの場として、保護者にゆったりとした気分で、自由に使ってもらうためのものです。こうした様々な配慮により、この園は保護者の厚い信頼と人気を獲得しています。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

自然幼稚園ヴァーレンドルフ協会森の幼稚園

「森はたくさんの発見と、創造力を養うことのできる最良の教師」

この森の幼稚園は、森の中で自由に遊びながら自然とふれあい、様々な体験を通して心身の健全な発達を促すことを目的に、地元の保護者たちによって設立されました。森の入り口には、極端な悪天候の時にシェルターとして使うトレーラーが設置されています。中には暖炉や遊びの材料、生きものの図鑑などがあります。また、森の隣に、在来種をたくさん生やした草地や保護者の協力で組み立てたティピなどを設置して、必要に応じてそれらも活用しています。

朝、子どもたちは森の入り口のトレーラーのそばに集まり、円になって挨拶の歌を歌います。一人の子どもがその日の森の中の集合場所を決めると、準備ができた子どもたちから、リュックを背負って次々に森の中に出かけて行きます。リュックの中には２度目の朝食（ドイツでは、学校や職場で ２ 度目の朝食をとる習慣があります）や座るためのマットなどが入っており、子どもたちは皆自分のものは自分で運びます。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

子どもたちは森の中では必ず二人一組で行動する約束になっています。これは一人が怪我をしたり動けなくなったとき、もう一人が助けを呼びに行けるようにという配慮からです。約束を守り、この日も子どもたちは二人一組で遊んでいました。駆け回ったり、倒木に登ったりと活動的に遊ぶ子がいる一方、絵本を読んだり、絵を描いたりする子もいました。

視察の日は、日本に滞在経験のある保護者の一人が「森で遊ぶことで子どもたちの免疫力は高められ、創造力が養われる。そして、思いやりも芽生える。子どもたちは自然のおもちゃから日々たくさんの発見をしている。森は私たち人間にとって最良の教師である」といった、森の幼稚園で自然とふれあうことによる子どもへの効果などを綴った日本語の文章を読み上げました。これに応えるかたちで、円福幼稚園の皆様が「グーチョキパーで何つくろう？」の日本の手遊びなどを紹介し、皆で一緒に楽しいひとときを過ごしました。

Copyright© 2015 Ecosystem Conservation Society-Japan All Rights Reserved

私たちの協会では、今後も、自然と文化が共存する美しいまちづくりのシンクタンクとして、自然を生かした保育・幼児教育の充実を支援してまいります。研修会の講師派遣、自然を活かした園づくりのコーディネート、そして個別の海外視察ツアーの企画など、みなさまのご要望に応じて対応いたします。お気軽にご相談ください。

公益財団法人
日本生態系協会
〒171-0021 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル
TEL 03-5951-0244 FAX 03-5951-2974